

「やわらかさ」に つつまれて

能登 香織（沖縄県）

震源地はもとより、日本列島を大きく揺るがせた東日本大震災。衝撃の瞬間は、息子を出産し12日目。関西にある実家で初めての育児に奮闘し、眠れぬ日々を過ごしていたころでした。産まれたばかりの愛おしい「生命」を育ていく夢や希望、そして、未知との遭遇：かなり不安。自分の身体はあちこちトラブっていても、たとえようのない幸福感でフワフワしていた不思議な時間。朝も昼も、もちろん夜の区別も無い新生児との日々、その時、飛び込んできたテレビのニュース速報は

「東北地方で大きな地震」。福島県で生活している妹家族との連絡も取れず、次いで「大津波の映像」。その後は、テレビのリモコンを手取ることをためらうものでした。育児に追われる自分の現状とはかけ離れた、まさに「生命」が消えていく瞬間を考えずにはいられませんでした。胸には、おっぱいを飲む我が子：『どうか、もう揺れませんか：』その後、妹家族や知人から無事の連絡を受け安堵したと同時に、この大震災の被害の大きさに、私がかつて経験した「阪神淡路大震災」の記憶が重なり心は痛みました。

息子が満3か月、関西から沖縄県那覇市の自宅に戻り、夫も一緒に家族3人の生活が始まりました。これまで助けてくれた父母と離れ、寂しさと心細さで満タンの自分を奮い立たせ、「辛い時ほど笑顔で過ごす」こと、「息子に悲しい表情は見せない」ことが日々の心がけ。でも、

そんなに簡単にはいかないのですね、育児って。どんどん疲れが増していく身体に、ストレスを発散する場所も無く悶々と考える時間。夫は家事育児に無頓着。きつと、どうやって私を手伝えれば良いのかが分からないでしょう。そんな姿に、またイライラ。もう、ネガティブな思考回路を遮断できなくなっていました。とにかく「心を洗濯する場所」を探さなくちゃ！

那覇の中心部に、生活に密着した商店が軒を連ねる元気な市場があります。「栄町市場」。その名は、戦後復興の中になぎわい栄えていたことから付いたとか。やさしい日本が残る場所には、おじいとおばあのお笑顔が似合う。

そんな市場の一角にある「つどいの広場わくわく」。肉や魚やテンプラのおい漂う中に、違和感無く同化している。逞しく頼もしい。県外出身で沖縄に身寄り

の無い私にとって、育児サポートスタッフの先生方も有難い存在。母のような姉のような親友のような…。私は「心を洗濯する場所」を見つけました！

そしてここで、地震や放射線の被害から避難してきた母子達と出会ったことも、私の心を洗い直すきっかけの一つとなりました。苦境に屈せず一歩を踏み出し、きつと大変だろう育児や家事も頑張る姿。母の笑顔には、市場のおじいやおばあ共通した、強さを秘めた「やわらかさ」がある。守るべきものを力強く抱いて、その上をやりわらかい笑顔でつつむ。私の通う「つどいの広場」には、そんな「ジヨウトウ」な笑顔があふれているのです。

